

氏 名 (国 籍)	ユスロン イーザ (インドネシア)		
学 位 の 種 類	博 士 (法 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,473 号		
学位授与年月日	平成11年 1 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
学 位 論 文 題 目	雁行形態モデルの神話性 —東アジアに於ける工業・経済発展及びそのモデルの研究—		
主 査	筑波大学教授	法学博士	進 藤 榮 一
副 査	筑波大学教授	法学博士	波多野 澄 雄
副 査	筑波大学助教授	法学博士	松 岡 完
副 査	筑波大学教授	社会学博士	駒 井 洋
副 査	東京経済大学教授	経済学博士	平 川 均

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

東アジア経済への視点は重大な過誤を犯してきた。東アジア経済の「奇跡」という表現は、数値（GDP成長率、輸出率、第一次産品への依存減少率）から導きだされたのであったが、その数値への批判吟味は正当になされていたとは言い難い。この数値は本当に実体経済と一致したものだったか？筆者はこの立場から東アジア経済のパースペクティブを再検証する。

いわゆる「東アジア経済の急成長」は赤松によって「発案された」とされる雁行形態モデルと一致している、とされてきた。そもそも赤松の雁行形態モデルは赤松の新機軸と言えるものではなく、正確にはリストの発案になるものであることには序論で触れるが、さらに悪いことに、この雁行形態モデルはもはや東アジア経済を観察する上では役に立たないことが明らかである。

赤松が最初に雁行形態モデルをいわゆる「発明した」時に、彼が抱えていた問題は次のように要約されるものであった。つまり、「いかにして非工業国は工業国となるか？」という問いである。この問いに答えるのが雁行形態モデルであり、より厳密に言えば、「雁行形態モデルによって示される、非工業国が工業国に至るにあたって辿るべき四段階の経済発展」という考えであった。

ここでは簡単に要約しておく、第一段階では先進国から工業品が輸入され、市場が発生する。第二段階では技術輸入に伴い、輸入代替工業が開始され、第三段階では国内工業品が国内市場を支配し、非工業国への輸出が開始される。また、技術産業（模倣）が開始、技術輸入が減少する。第四段階では非工業国への消費財輸出が減少、先進国への消費財輸出が上昇、調和的国際分業が確立し、かくして新しい「雁」が誕生するというわけである。

しかし、本論の第一章で詳細に示すように、上記の四段階の第一と第二段階は現前する東アジア経済には当てはまらないし、又、次の第三と第四段階も同様である。例えば第一段階について言えば、雁行形態モデルと異なり、そもそもアジア諸国の「市場発生」は先頭の「雁」（即ち日本）により導かれたわけではなく、ヨーロッパ諸国によって導かれたのである。歴史を見れば明らかだが、アジア諸国は日本から工業品の輸入を始める以前から工業品をヨーロッパから輸入し、そして市場も既に発生したのである。第二段階においても、輸入代替産業が発展せず、技術模倣もなかった。結局のところ、これらのアジア諸国に起きたのはその現地企業による輸入代替ではなく、「外国企業による輸入代替」なのである。又、技術においては「技術模倣」ではなく、「技術移転」だっ

たのであり、雁行形態モデルとは異なる方向へ進んでいたのである。

本論では以上のような視点で、より詳細な論証をもって、こうした「技術移転」あるいは「FDIあるいは外国資本による」という概念が如何ほど雁行形態モデルと、現在の東アジア諸国の経済・工業発展の実体とを引き離したかを確認する。

結局、雁行形態モデル、即ち四段階を経る工業・経済発展は現実に生起していなかったのだが、これをよりの確に、厳密に言い換えるのなら、（日本を除く）東アジアの工業・経済発展とは「見かけ上の発展」なのである。

本論は赤松の「雁行形態モデルへの批判」という形式で、東アジア経済を分析してゆく。

構成は次のようになっている。

序章では、論文の構成と概略を示し、あわせて、本論の趣旨に密接に関わるわけではないが、しかし指摘する価値が十分にある問題点、すなわち「雁行形態モデルの起源」の問題について簡単に論述する。第一章では赤松の四段階の内、第一、第二段階について分析し、東アジア経済がこの最初の二段階に適合していないことを確認する。第二章では第三、第四段階について分析し、同様にこの段階もまた現実の経済に適合していないことを確認する。第三章では、前二章の議論を承け、雁行形態モデルの印象的な比喩「新しい雁の誕生」という点について議論する。筆者は（日本を除く）東アジア経済は「見せかけの発展」なのであり、いわば「雁は泥沼に浸って飛翔する夢を見ているだけなのだ」と指摘する。続く第四章においては、雁行形態モデルに代わるべき新たな視点・観点を模索するべく、今や東アジア経済に強大な影響力を持つ日本と東アジア諸国との関係について、歴史的視点を導入して過去から検証し、拠って未来を展望せんとする。かつて、五十年前に構想された大東亜共栄圏は、比較的穏やかな表現で、例えば「アジアのリーダー日本」といった表現などで期待されていると言えよう。しかしながら、来るべき日本を含む東アジア経済圏は「先導の雁とそれに追従する雁達の逆V字」などという牧歌的なものではないであろうことを予測する。

雁行形態モデルの批判と東アジア経済の分析を主題とする本論文の概略は以上である。

## 論文の内容の要旨

本論文は、従来、アジア経済研究者や日本研究者の間でいわば当然視され疑問視されることのほとんどなかった、いわゆる「雁行形態モデル」について、その歴史的起源を含めて大胆にして緻密な学説史的検証を行い、その神話性を、現在進行中のアジア経済危機との関連で行った。学説・モデル検証に関して見せた論理の緻密さと、モデルの歴史的検証に際して示したすぐれた実証性、さらに現在展開しつつある現実の危機に対して見せた分析の鋭利さの、各々について実に高く評価されなくてはなるまい。

またそのモデルを日本とアジアのかつての関わり方の原型たる「大東亜共栄圏」構想に位置づけ、同モデルの提唱者・赤松の思想的立場づけをもはじめて明らかにした点でも、さらにはモデル自体の発想の原点におけるリストの関係について批判的視座を用意した点でも、独創性と実証性において高い評価が与えられよう。

おそらく、日本人研究者なら決して明らかにできなかった斬新にして大胆な視点が随所に示されていること、またおそらくは経済学プロパーの専門家なら決して明らかにできなかった思想的、歴史的かつ政治学的な視座が、その根幹を貫いていること、そして本テーマについて当該分野ではじめて十分な分析と批判が加えられていること、それらの諸点で本論文は、内外で希有にして最も優れた学術的貢献をなしているといって過言でないだろう。

上記のような実証性と鋭い独創性に特色づけられるにもかかわらず、なお本論文は次のような短所を内包していることが指摘された。第一に赤松とリストとの関係について、その論証に今少し実証性が、とりわけ赤松の弟子たちとのインタビューなどを通じて示されてはしかったこと。第二に、雁行形態モデルが、タイ、インドネシア、フィリピンのようないわゆる後発アジア新興工業国について十分に妥当するとはいえず、韓国や台湾、シンガ

ポールなど先発アジアNIEsについてはかならずしも妥当せず。その際なぜ妥当しない部分が出てくるのかが明らかにされていない。第三に、雁行形態モデル批判が、その多くの部分で実証性を持ちえたにせよ。とりわけ直接投資を中心とする受け入れ国側の工業化への離陸へのプラス効果－雇用，技術移転，技術者・企業家育成，国内市場の拡大など－もまた勘案すべきであることが指摘された。

とはいえ，上記の短所にもかかわらず，本論文が先に示した学術的貢献の高さは否定するべくもなく，今後の補正を待つにしろ，学位論文として十分に値するものとみとめられる。

よって，著者は博士（法学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。